2Ga－8

乳ガン術後者の胸部温熱生理反応

文化女大　○田村照子　永吉美穂，　放送大　　酒井豊子

目的　乳ガン手術経験者の肌着着用に関する実態調査の結果、手術者は術後数年を経た後も、患部が重い感じがする，身体が冷えるなどの症状・違和感を感じており、さらにブラジャー内気候の観察からは患部のむれ、むれによる湿疹等が問題となっている。これらの諸症状が単に心理的なものか、あるいは生理学的変調によるものかを明らかにする目的で、乳房切除者の胸部を中心とする温熱生理反応を調査した。

方法　被検者は左乳房全切除者(Sub.0)、右乳房 1/4切除者(Sub.A) 及び年齢・体型の似通った健常者(Sub.I) である。環境条件は、予備室28± 1.0℃，測定室22± 0.5℃，28± 0.5℃，34± 0.5℃いずれも湿度50±10%RH，気流 0.1m/sec 以下。着衣はショーツ及びフレアパンツ，測定項目は直腸温，血流量，代謝量，胸部サーモグラフィ，胸部局所水分蒸散量及び温冷感，湿潤感，快適感の主観申告である。

結果　1．直腸温，体重減少量，血流量については健常者との差はみられない。2．乳房の皮膚温は健常者ではほぼ左右同温であるのに対し、切除者では切除例の方が高い結果となった。ただし、Sub.0 では気温の低下に伴い、左右差が大となるのに対し、Sub.A では気温の上昇に伴い左右差が大となった。3．乳房部蒸散量はSub.0 は左右差があまり明確ではないが、切除側の鎖骨下では汗の蒸発が妨げられ、皮膚がしめりやすい。一方、Sub.A では明らかに切除側の蒸散量が少く、これが先の皮膚温の左右差を生じたと考えられる。